

## えひめの地域づくりの明日を想う

上浮穴郡久万高原町 民宿・観光農園 狩場苑代表者 浅井 一郎治

■民宿・観光農園 狩場苑  
http://www12.ocn.ne.jp/~karibaen/

私は、かつて新入りの村役場の職員として、昭和の町村合併を経験し、役場で38年間、そして商工会で4年間、勤めさせて頂き、お蔭さまで晴耕雨読の現在を迎えることができます。

さて、最近の、愛媛の地域づくりについて提言したいことがあり、誌面の都合で2点についてのみ私見を述べたいと思います。

## 地域づくりに科学的な視点を

ところで、科学的とは、物事を実証的、論理的、体系的に考えるさまだと説かれております。

今なぜ、こんなことを考えるかといえば、先頃、平成の市町村合併があって、市町の未来設計、つまり「基本構想」の策定が非常に大きな課題であると思うからです。

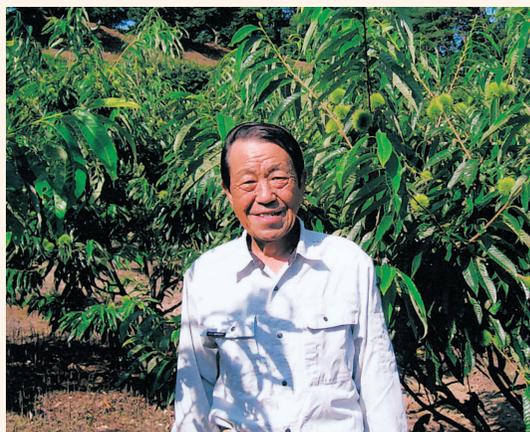
その際、私は、地域を科学的に捉えて、本質的、長期的な視点で基本構想を練り、実践していくことが大事だと考えています。

そのためには、研究者、とりわけ地元愛媛県下の、大学の研究者等の皆様の参画が大きな力になると確信しています。

勿論、既に先進的な取り組みをされている市町もあり、学ぶべきことが多いと思います。

また、自治の大きな仕事のひとつとして、当然のことながら、住民、関係機関等の参画は必須要件でしょうし、市町が主体性を持った「手づくり」が強く望まれます。

振り返って、昭和の合併のときはどうだっ



栗園を背景に 浅井一郎治

たでしょうか。

我が町のことで少し気恥ずかしいのですが、旧久万町合併直後の昭和36～37年、町独自の施策として、町民の生きていく未来設計をたてるため、農林業、わけでも林業を中心とした「構造改善総合調査」を、愛媛大学農学部の学部長さんなど数人の先生方の参画を得て実施しております。

この調査には、県行政、森林組合、林業研究グループ、篤林家(注①)のほか、町の林業が農家的林業であるため、農協も加わりました。

そして、調査を終えて町の具体的な施策が展開されますが、実践段階でも、産官学住とも言える4者の協働による事業展開が計られてきました。

また、商工業の振興のために、松山大学の先生方に長期間、随分と応援して頂きました。

このように、実に多くの研究者等の皆様の英知にも助けられ、40数年間、政策が実践されてきたと思います。

加えて、国、県担当者等の親身になった関わりも忘れてはならないことです。

## 常に問われる職員の資質

さて、これらの施策のうち、担い手について二つだけ紹介します。

その一つは、林業の振興と若者の定着をめざした株式会社「いぶき」についてです。設立後16年を経過し、今、社員は46人、若者主体で、殆どが町内に住み地域の担い手になっています。

あと一つは、農業公園での新規就農者の状況です。事業を始めてから八年が経ち、現在、既婚者5人を含み15人がトマト生産を主体に、この地域に夢を懸けております。

いずれも、苦労はあるものの、自分の夢の実現、地域の明日をめざして励んでおります。

昭和の時代、当時の首長から、常日頃、諭されていたことが二つありました。

その一つが、「勉強をしてほしい」ということでした。住民の幸せづくりのために、町行政に携わっている職員が、資質を高めないで真の奉仕者の役割が果たせるか、ということです。

二つ目は、「理論と実践の間の頻繁な往復によって、町政策の質を高めてほしい」つまり、

ドイツの哲学者ヘーゲルの止揚(アウフヘーベン)の理論(注②)を勉強して、町行政に応用しろということでもありました。

また、昭和58年からは、職員の資質向上を目的に、現業を除く全職員を対象として、年末年始に課題論文を作成することとなり、例えば課長級は4千字程度が課せられました。

この研修制度は、十数年間、休むことなく続けられたのです。

以上の提言、参考になれば幸いです。

## 【注】

- ①篤林家…林業に対して深い造詣を持った、熱心で研究的な林業家。いわゆる林業の達人。
- ②ドイツ語の「aufheben」には、廃棄する・否定するという意味と保存する・高めるという二様の意味があり、ヘーゲルはこの言葉を用いて、弁証法的発展を説明した。つまり、古いものが否定されて新しいものが現れる際、古いものが全面的に捨て去られるのではなく、古いものが持っている内容のうち、積極的な要素が新しく高い段階として保持される。否定を発展の契機としてとらえる考え方。広くは「違った考え方を持ち寄って議論を行い、そこからそれまでの考え方とは異なる新しい考え方を統合させてゆく」というような意味でも使われる。



県立自然公園 皿ヶ嶺連峰をのぞんで